

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381188

研究課題名(和文)「言語活動の充実」の具体化のための教師教育のあり方についての研究

研究課題名(英文) Study on way of the teacher education for realization of "Enhancement of language activities"

研究代表者

渡辺 哲男 (WATANABE, Tetsuo)

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：40440086

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、学習指導要領のキー概念である「言語活動の充実」に関して、言語活動を誘発する環境的要因に着目する研究を行った。具体的には、最近のミュージアムで行われている鑑賞教育やワークショップに着目し、展示されているモノから鑑賞者の言葉を誘発するという試みを、学芸員たちがいかように工夫しているかを検討した。これらの考察から、教室における学習者の詩人的言語の重要性を見出した。詩人的言語は、学習者の実験的思考を支えるのである。

研究成果の概要(英文)：This study examined an environmental factor to cause language activities about "Enhancement of language activities" in Course of Study. Specifically, we examined the appreciation education and the workshop performed in many museums recently. A curator let viewers get close to art in much devising to cause the language activities of viewers. From these consideration, we reached the conclusion to attach great importance to the language of the poet whom the learner in the classroom used. The language of the poet supports the experimental thought of the learner.

研究分野：国語科教育、教育思想史

キーワード：「言語活動の充実」 ミュージアム 言葉とモノ 西田哲学 教科教育学と教育哲学の連携 研究者と現職教師の協働

1. 研究開始当初の背景

「言語活動の充実」が学習指導要領のキー概念であることはいうまでもないが、教室のなかでそれが実現した状況というものが具体的にどのようなものであるのかについては、明示されているわけではなく、研究代表者が関わった現場の教師たちからも、多くの戸惑いの声が挙がっている。たとえば、それは「話し合い活動」が多くなった状態であるのか、「書く」活動が増えた状態であるのか、はたまた、板書を多く書き取る状態と考えればよいのか、等々である。こうした、単に、「活動」的営為が増えることが「言語活動の充実」であると短絡してしまった場合、今までより学習指導案に班活動が増えるだけ、といったような結果になってしまうだろう。

こうした現状をふまえれば、研究者は、現場の教師たちに「言語活動の充実」の具体的な姿を提示する必要がある。そして、この姿を実際に広く教室で実現してもらわなければならない。「言語活動の充実」の核となる教科は、いうまでもなく国語であると思われるが、国語科教育の研究者だけでは、「言語活動の充実」の具体化した姿は、具体的な1時間の授業において実現した(する)姿を発見したり、提案したりすることしかできない憾みがある。すなわち、私たちが「教育」という事象の中で、幅広く「表現する」という営為の原理的な意味内実を追究するには、限界がある。

そこで本研究においては、国語科教育の研究者に加え、広い意味での「教育」における人間形成の問題を論じている教育哲学・教育思想史を専門とする研究者に参加してもらい、1時間の授業づくりにおける「言語活動の充実」とは何かを検討するとともに、さらに幅広く、私たちが「表現すること」と、その人間形成の意味を同時並行で検討することで、授業の改革とそもそもの「教育」というもののありようを捉え直すということをつなげていこうというのである。

2. 研究の目的

(1)「言語活動の充実」の教室での具体的な姿を、1時間の授業をつくることに目を向ける教科教育学研究者と、幅広く「教育」という事象の人間形成の意味を考察する教育哲学研究者が協働で研究することで提示する。

(2)(1)で提案した「言語活動の充実」の具体的な姿をどのように授業で実現すればよいか、すなわち、現場の教師たちがどのように実践すればよいか、教師教育の面から検討し、実際に教師が試行することをめざす。

3. 研究の方法

(1)「言語活動」概念に関する理論的・思想的検討を行う。私たちが「主体的」に「言語活動」という営為が、いかに捉えられてきたのか。研究代表者が専門としている国語教育論や西田哲学、あるいは研究分担

者が専門としている西洋の芸術論やコミュニケーション論を手がかりとしながら考察する。

(2)「言語活動」を誘発する環境的要因に関して、「ミュージアム」(に関する研究)を援用して考察する。学校現場においては、「言語活動」の機会を授業で増やすことが目指される場合が多い。しかしながら、「言語活動」は、教師に指示されてするだけではなく、状況に規定されることで誘発されるという側面もあるはずである。そこで、「ミュージアム」における展示、あるいは、子どもを「ミュージアム」に親しませるための鑑賞活動やワークショップを盛んに行っている学芸員の活動に着目し、彼らがいかに展示されているモノから、鑑賞者の「言語活動」を誘発しているかを検討し、「ただたくさん話をさせるだけ」という学校現場の「言語活動の充実」を再考する手がかりとする。

4. 研究成果

3年間の研究期間の中で、現役の学芸員や博物館教育論、コミュニケーション論に関心のある研究者を公開研究会、公開講演会の講師として招き、多くの示唆を得ることができた。その成果を公の場で問うべく、多くの学会でラウンドテーブルや学会発表を行い、私たちの得られた知見を発表することができた。また、最終年度末には、研究メンバーのみならず、上記の講演会講師数名の原稿も収録した研究成果報告書を印刷し、関係する研究者や主要な大学図書館等に送付し、本研究の成果を広く知らせることができた。

具体的な研究成果の一端を以下に示しておく。私たちは、上記のように、「ミュージアム」をめぐる議論に示唆を得ながら、モノに誘発される「言語活動」を考えてきた。どういふときにモノに誘発されて言語活動が始動するかを考えたとき、それは、ある対象(モノ)に対する情性化した認識が更新され、モノを「凝視」して、あるいは「注意深く」見ることによって、静的なモノをあえて動的に捉えるところから出発するというのではないか。そのとき、モノを異化する言語というのは、どのような言語なのかを考えるのが、本共同研究の最終的なゴールとなった。そのケースの一つとして、私たちは、いわゆる「詩人的な言語」にたどりついた。

たとえば和辻哲郎は、『続日本精神史研究』において、「もの」とは、有無の混沌のなかで、事象の具体的な相貌が取り払われた姿だと考察している。そして、かような「もの」には自明的に存するのではなく、私たちの「ふるまい」=「こと」において初めて成立するのだと考えたわけである。

そして、当然、「こと」が起こるには、起こす「者」(個人的、社会的人間)がその根源になければならない。ゆえに和辻は、「物」「こと」「者」という構造を「こと」に

見出す。このことは、「物」を見出すという「ふるまい」によって、「自己」が発見されるということでもある。

たとえば、私たちが「コップがある」ということは、和辻に従えば、「私がコップを有(も)つ」ことをも意味するのであり、すなわちコップを有つ己が「ある」ことになるのである。そうであるならば、私たちは「ある」ということを了解することによって、己の存在を自覚するということになるだろう。

こうした思想を踏まえると、私たちが、「無」と「有」のはざま、あえて「もの」が「ある」と言語化するということは、「自己」の存在を自覚するための重要な営みであると考えることができる。「言語活動」というのは、「もの」の見え方を私たちが表現することによって、「もの」を私たち自身がどう見ていたかということをはじめて了解する、いわば、認識の始動(生成)を意味するのである。

私たちの「表現」には身体の動きや絵画、音楽など多様な種類がある。だが、「有」と「無」の狭間に揺れるダイナミズムのなかで「もの」が「ある」と表現するのにつけては、恐らく言語なのではないか。たとえば目の前に置いてある(静止している)コップであっても、コップを「コップ」と「名づける」までの、実に微妙な「時間」(スローモーションだと考えればよい)を捉えることができるのは、言語であろう。だからこそ、私たちは、言語によって認識を始動することを重視したい。静止している事象を静止していない事象(スローモーション)のようにとらえることは、映像などでは困難だろう。

かような言語表現は、阿部公彦の著書(『詩的思考のめざめ』東京大学出版会、2014年)のタイトルを借りれば「詩的思考のめざめ」となるだろうか。つまり、「言語活動」といっても、このスローを表せるのは、「詩的言語」とならざるを得ない。アートを表現するのは、アートをもってするしかないのではないか。

子どもの頃の読書感想文を思い出してみるとよい。「おもしろかった」「つまらなかった」という手垢にまみれた感想が全く評価されず、にもかかわらずそう表現するしかなかったというあの苦しみ(?)。子どもの頃の読書感想文を描く対象はおおむね文学作品だったと思われるが、文学作品に「感想」を書くには、「文学」をもってするしかなかったのではないか。そして、仮に、惰性化した認識を更新するようにモノを「見る」(語り得ないモノをあえて語る)ためには、「詩人的な言語」をもってするしかないのではないだろうか。

では、それを学習者はどのように理解するのか。これは、教師が「自由に表現してください」と指示するだけでは困難である。「言語活動」をどう「教育」するか、というのは、自発的な学習者の表現活動を重視する「言語

活動の充実」とは対極にある考え方も知れないが、そもそも「言語活動」をするにも、ある種の「文法」が必要なのではないか。その一つの可能性として「詩人的な言語」のヴァリエーションを「教える」ことの重要性を、本研究メンバーが揃って公の場で発表した最後となった、2015年の教育哲学会ラウンドテーブル「教育活動に於ける言葉とモノ」において、研究代表者が報告した。また、研究分担者は、モノの多様性を検討するためにその範疇を音楽にまで広げ、また追悼施設の展示における「言語活動」という具体的なケースを考察した。

また、研究代表者は、(教育)哲学研究成果を国語科教育の教材研究に援用するために、小学校の現職教師と協働で教材研究と授業づくりを行い、研究代表者が実際に小学校で授業提案を行うという、研究者と現職教師の新しい交流のあり方を一つのケースとして示した。これらの成果は、先述の研究成果報告書に、詳細に記載されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計13件)

渡辺哲男「小学校国語科における文学教材の指導法に関する考察：研究者と現職教師の協働による授業づくりを通して」『立教大学教育学科研究年報』第59号、査読無、2016年、37-59頁。

渡辺哲男「スイミーの「学びに向かう力」を！」明治図書『実践国語研究』第40巻第2号、査読無、2016年、13-14頁。

山名淳「教育史にとって『実践』とは何か：上原専祿の「教育史学=人間形成の歴史学」論の今日的意義(教育史学会第58回大会記録)」『日本の教育史学』第58集、査読有、2015年、104-109頁。

山名淳「教育史にとって『実践』とは何か：上原専祿の「教育史学=人間形成の歴史学」論の今日的意義」『教育史フォーラム』第10号、査読有、2015年、1-19頁。

渡辺哲男「「あまちゃん」としてのスイミー：西田哲学における「自己」と「見る」を手がかりとして」『立教大学教育学科研究年報』第58号、査読無、2015年、83-94頁。

渡辺哲男「秋田喜三郎における「創作的読方」の形成過程」全国大学国語教育学会『国語科教育』第75集、査読有、2014年、96-103頁。

山名淳「『輸入教育学』という喩えの限界」『教育哲学研究』第108号、査読無、2014年、94-95頁。

渡辺哲男「わたしが与える「自由」は「不自由」?：特別支援学校における句会の授業を手がかりとして」『立教大学教育学

科学研究年報』第 57 号、査読無、2014 年、73-90 頁。

山名淳「金融教育における道德教育の可能性：教育実践への架橋編」『月刊道德教育』2013 年 7 月号、査読無、84-85 頁。

山名淳「金融教育における道德教育の可能性：オピニオン編」『月刊道德教育』2013 年 6 月号、査読無、84-85 頁。

渡辺哲男「大学教師が少しだけ中学教師になって「ごんぎつね」の授業を行う試み：教育哲学・思想史と教科教育学の連携の足がかりとして」『滋賀大國文』第 50 号、査読無、2013 年、51-69 頁。

山名淳「「ごんぎつね」によって「『物語』を哲学する」授業：渡辺哲男氏の国語科授業における 現実 と 物語 の間」『滋賀大國文』第 50 号、査読無、2013 年、70-74 頁。

柴山英樹「「物語ること」を「哲学する」ためのしかけ：渡辺哲男氏による中学校第二学年の国語科授業の分析から」『滋賀大國文』第 50 号、査読無、2013 年、75-81 頁。

〔学会発表〕(計 10 件)

山名淳「芸術家の学校論から考える「これからの学校空間」：フンデルトヴァッサーの思想と学校建築」武蔵野大学フォーラム(於武蔵野大学・東京都西東京市) 2015 年 12 月 5 日。

今井康雄・渡辺哲男・柴山英樹・小松佳代子・眞壁宏幹・森田伸子・山名淳「教育活動における言葉とモノ」教育哲学会第 58 回大会ラウンドテーブル(於奈良女子大学・奈良県奈良市) 2015 年 10 月 11 日。

柴山英樹「ヴァルドルフ教育における人類の進化と言語の教育：言語教育カリキュラムの比較検討を通じて」教育哲学会第 58 回大会一般研究発表(於奈良女子大学・奈良県奈良市) 2015 年 10 月 11 日。

渡辺哲男「「あまちゃん」としてのスイミー・授業実践篇：研究者と現職教師との協働による授業づくり」全国大学国語教育学会第 128 回兵庫大会(於姫路商工会議所・兵庫県姫路市) 2015 年 5 月 30 日。

渡辺哲男「1920 年代以降の長野県における西田哲学の系譜：島木赤彦と金原省吾を中心として」教育哲学会第 57 回大会一般研究発表(於日本女子大学西生田キャンパス・神奈川県川崎市) 2014 年 9 月 14 日。

渡辺哲男・山名淳・柴山英樹「「ミュージアム」としての学校/学校としての「ミュージアム」：博物館/美術館の教育哲学？」日本教育学会第 73 回大会ラウンドテーブル(於九州大学箱崎キャンパス・福岡県福岡市) 2014 年 8 月 22 日。

渡辺哲男「「あまちゃん」としてのスイミー：「自己と「環境」の相即的關係に着目

して」第 126 回全国大学国語教育学会名古屋大会自由研究発表(於愛知県産業労働センター ウィンクあいち・愛知県名古屋) 2014 年 5 月 17 日。

山名淳「教育における「理論と実践の融合」をどう考えるか：教員養成における二つのモデルをめぐる覚え書き」E. FORUM セミナー「『教職の高度化』をどう構想するか」(於京都大学法経第 6 教室・京都府京都市) 2013 年 12 月 12 日。

渡辺哲男・牧戸章・柴山英樹・大杉稔「ミュージアムで国語教育：ことばとモノの関係を考える・その 1」第 125 回全国大学国語教育学会広島大会ラウンドテーブル(於広島大学・広島県東広島市) 2013 年 10 月 20 日。

渡辺哲男「ことばの学びが抱えるジレンマ：特別支援学校における句会の試みを通して」第 124 回全国大学国語教育学会弘前大会自由研究発表(於弘前大学・青森県弘前市) 2013 年 5 月 19 日。

〔図書〕(計 5 件)

渡辺哲男・柴山英樹・山名淳・小笠原喜康・勢力尚雅『「言語活動の充実」の具体化のための教師教育のあり方についての研究』(平成 25~27 年度 科学研究費補助金・基盤研究(C) 研究成果報告書) 私家版、2016 年、139 頁(渡辺 1-53 頁、柴山 55-76 頁、山名 77-92 頁執筆)。

澤本和子・渡辺哲男他『国語科授業研究の展開：教師と子どもの協同的授業リフレクション研究』東洋館出版社、2016 年、232 頁、(56-65 頁執筆)。

森山卓郎・渡辺哲男他『書けない子が書けるようになる！：アクティブに「書く」力をつける国語科授業モデル』明治図書、2016 年、128 頁(40-43 頁執筆)。

ヴィガー、L.・山名淳他『人間形成と承認：教育哲学の新たな展開』北大路書房、2014 年、229 頁(1-16 執筆、47-70 翻訳、167-186 翻訳、187-200 執筆)。

林泰成・山名淳他『教員養成を哲学する：教育哲学に何ができるか』東信堂、2014 年、332 頁(80-99 頁執筆)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺 哲男(WATANABE, Tetsuo)

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：40440086

(2) 研究分担者

牧戸 章(MAKIDO, Akira)

滋賀大学・教育学部・准教授

(平成 26 年 3 月 25 日まで)

研究者番号：40190334

山名 淳 (YAMANA, Jun)
京都大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：80240050

柴山 英樹 (SHIBAYAMA, Hideki)
日本大学・理工学部・准教授
研究者番号：60439007